

# 南方

## 電信第十五連隊

健在なり

兵庫県 小川 昌之

召集時には両親は共に健在で、第一人、妹二人の四人兄弟だった。兄が一人いたが勤務中、感電のため事故死した。当時、私は山陽中央水電株式会社に勤め、変電係をしていた。

昭和十八（一九四三）年十二月十四日、現役兵として広島電信第十五連隊第一中隊に入隊した。一カ月も経たないうちに輸送船に乗りくみ、堂々と宇品港を出港した。七隻の輸送船で船団を組み前後に護送の駆逐

艦がついた。私の乗船した徳島丸は三〇〇〇トン級の船で輸送指揮官も乗り込んでいた。途中、九州の若松に寄港し武器、弾薬を補給した。

大東亜戦争が勃発してから既に二年がたち、彼我の戦力の差が徐々に現れてきた。飛行機、潜水艦等の戦力武器の差が歴然としてきた。台湾の高雄に寄港する寸前に敵潜水艦により七隻の輸送船のうち、三隻が撃沈された。

十二月二十日、残りの四隻の輸送船は敵潜水艦の襲撃を避けるため、六時間の時間差を設けて出港したが、高雄港外で待ち伏せしていた潜水艦のため二隻が沈められてしまった。あつという間もなく、沈んだ船と運命を共にした兵のことを思うと情けないやら、悔

しいやら、これが戦争だと思ってもやりきれない。

新年を輸送船の中で迎え、一月六日、仏印サイゴンに上陸し、それから二日後、陸路を鉄道便で一路西へ向かった。

一月十五日に仏印—タイ国境を通過する。一月十八日、タイ—マレー国境を通過し、二十二日に無事昭南市（シンガポール）に到着、南兵営に宿営する。

一月二十五日、「紅丸号」でシンガポールを出帆し、二十七日、ジャワ島のジャカルタ（バタビヤ）に上陸した。

一月三十日、電信第十五連隊（治第一八九六部隊）野口第一中隊に有線班として配属になった。そこで約一年間、一般兵科教練及びガス教育を受けた。

昭和十九年の六月、第一期の検閲を終了した。第一選抜で一等兵に進級、十二月には、これも第一選抜で上等兵に進級した。

十二月二十二日、南方軍第十六軍（治）司令部合同通信所及びセラシ通信所勤務を命じられた。セラシ通信所は、兵長以下六人の交替勤務である。セラシは

ジャワ島とスマトラ島の間に位置するスンダ海峡にある小さな島で、敵艦船の通過監視、敵潜水艦の航行を阻止するため機雷の敷設等が主な任務である。もちろん本部との有線・無線の連絡が主な任務であった。

昭和二十年も二月に入り十四日、中村中将が司令官である南方軍第三十九軍（義）へ派遣を命ぜられジャカルタを出発した。

二月十七日、シンガポールに上陸する。米軍が戦闘機、爆撃機でシンガポールを爆撃、迎え撃つ我が飛行機と壮烈な空中戦が繰り広げられた。

われわれは、シンガポールの市外の南兵営に宿営中、赤十字船「阿度丸」の使役をしていたが、「阿度丸」は南シナ海を渡航中、兵器・弾薬を積んでいたとの疑いで撃沈されてしまった。

サイゴンへの集結命令が出た。米軍の制空権下、またゲリラの跳梁下に大部隊の徒步行軍は危険なので、夜間の鉄道を利用することにした。

三月一日、シンガポールを出発、サイゴンを目指しマレー半島縦断鉄道で一路北上する。

三月十四日 バンコクに到着。そこからサイゴンを目指したがバンコクから東へ行くことは不可能になり、やむを得ずバンコクに駐留する。

四月五日、バンコクで第三十九軍臨時通信隊の編成が完結する。私は(義)第七九九〇部隊・十河隊・野口隊(第一中隊)に配属になる。

五月十九日、臨時編成下令。鉄道第九連隊内通信所勤務になる。

六月一日、下士官勤務兵長に進級す。

六月十日、南方軍第六通信隊付司令部内合同通信所勤務になる。

八月十五日、合同通信所において参謀と共に天皇陛下の終戦宣言を受信する。

九月十一日、南方軍第十八方面軍司令部通信所から終戦処理司令部勤務(バンコク市ビヤタイ路)になる。

終戦処理司令部は戦時中の捕虜虐待の有無を調査し、処刑する連合軍の下請け機関である。

われわれ通信隊は戦時中、第一級で戦ったこともなく、また捕虜を預かり監視したこともなく、戦犯にはほど遠いので安心していた。戦犯に指名された人の中には無実の罪に泣く者、冤罪で罪に服しオイオイ泣く者、ビンタ数回で終身刑に服する者など気の毒な人も多かった。こちらにも捕虜の身、どうしてやることもできない。戦争が終了し目の前に故国への復員が見えていくというのに、と思うと心底から気の毒に思った。

昭和二十一年四月十一日にバンコク市クロント街の日本司令部(復員業務)に勤務した。

七月五日、仏印(サイゴン)を出港し日本に向かう。駆逐艦「春月」が復員船だった。

七月十八日、浦賀港に入港、検疫を受ける。

七月二十日、浦賀で除隊式を行い復員する。

帰京後、関西電力姪姫路支店電気課に勤める。

ときどき考える。私の軍人生活、戦争体験は何だったのかと。輸送船で航行中、鉄道輸送中、多くの戦友を失い、死に直面した。ジャワ警備中、バンコク駐屯

中、空襲にこそ遭ったものの地上戦の経験はなかった。ビルマやフィリピンの死闘と比ぶべきもない。ましてサイパンや硫黄島の玉砕に比すべきもない。特攻隊や特殊潜航艇の乗組員と比ぶべきもない。一言に「運隊」で解決できるものでもない。五体満足で復員できた身の幸せを感謝し、戦死病者の冥福を祈るのみである。

## 南洋（独混第十一連隊）

### エンダービー守備隊

岩手県 佐々木 文治

今次大戦が終結して五十余年、敗戦国日本は戦後非常な経済発展を遂げ、世界の先進国となりました。終戦以後の困窮した生活に耐え忍び、そしてその脱出のために非常の努力を傾けたものです。

今、その復興の苦難の年月の様子は一つも見受けられません。戦争中、私共は戦いの前線に送り出され、

敵弾の中をかいくぐり、そして戦死をし、負傷もし、病苦にも悩まされ、幾多の苦難に耐えて来た。

私達が今、斯く在る身を感じする意味におき、戦争における生と死を直視し、戦争の悲惨さを後世に残したい思いを込め、申し上げる。また、生死を共にし、平和をこい願ひ、そして、私達と行動を共にして、不幸にも散った戦友達に思いを致し、日本が永遠に栄えることを確信し散った英霊に鎮魂の合掌を捧げたいと思ひます。

私達の民族の中に流れている「平和とは何か」を、後世に伝えたいものです。多くの方々には知られざる元独立混成第十一連隊の、内南洋の孤島エンダービー諸島及び、第三十一軍（備）関連の戦についても申し述べたいと思ひます。

そのためには、第三十一軍とは何であり、どこでいかに戦ったのかについての記録、資料を記載する必要があります。その戦闘序列・部隊略歴、部隊行動はいかなるものであるかを申し上げます。